国土学事始め

大石久和
国土技術研究センター理事長

国道と酷道　地域の暮らし映す

いま若者の間で、全国の国道を駆けめぐったり、車のフロントからの風景を撮影し「車載動画」としてニコニコ動画やユーチューブに掲載して、多くの人に楽しんでもらったりすることが盛んになっています。国道愛好家と自称する人も現れているほどで、国道めぐりがエンターテインメントとして認知されてきたようなのです。

その楽しみ方はいろいろで、起点から終点まで完走したり、旧道を探して走ったりといろんな系統があるようですが、極めつけが「酷道系」といわれる楽しみ方です。

行き止まりの国道、すれ違いの困難な一車線ギリギリの国道、車道がとぎれ途中が階段だけになってしまう国道などを探しては出かけ、その経験を映像化してみたり、新宿などで語りの会を開いたりと、随分盛り上がってきているのです。

ここには、東京など大都会においては分からない、変化に富む地形や風土を持つ日本を楽しもうという、潜在的な気分があります。経済評論家は、起業が簡単で何かと効率的な大都市に人が集まることは、この国の経済にとって正しいことだと言います。

しかし、何百年にもわたり連綿とわれわれの祖先が汗水流して手入れし、いつくしんできたこの山がちの自然豊かな環境を、経済的な理由だけで放棄し、荒れ果てさせていいのか、との気分が若者に芽生えてきたと考えるのは、少しうがちすぎの受け止め方でしょうか。

食べられないのでは困りますが、経済的により豊かになるということは、長年日本人の暮らしの舞台となってきた日本列島を、荒廃させてまでも達成すべき価値なのでしょうか。

国道を巡って全国を行くと、過疎地あり、限界集落あり、大都会のための洪水防止や水源地として犠牲になったダムサイトあり、シャッター街となり果てた地方の中心市街地あり……と、この国のいまをいやがうえにも体験することになります。

そして厳しい条件のなかで、守られてきた伝統の品や風俗、地域に根付いた人々の暮らしと触れ合うのです。大都会しか知らないというのではなく、時間と空間のなかでこの国の広がりを実感するこの運動が、是非盛んになって欲しい。

そのために道の駅が本来の役割を担ってほしいのです。